

# 滋賀県農林振興計画書(昭和33年10月)抜粋

(現在=昭和32年、第1年=昭和33年、第10年=昭和42年)

## IV 滋賀県林業の方向

本県における林業の態様は、総じてこれを見ると、今日の全国のそれと特に異つた特色を持つものとは考えられない。資源の蓄積状況、生産活動についても現在の我が国民有林の姿がそのまま縮小された形において見られる。たゞ県内を地域的にみれば夫々の地域の歴史的、立地的環境に従つて、その一面が強調されていることがうかがわれ、林業発展段階の一断面がみられるに留まる。こゝでは本県林野を活用する林業の社会経済的に求められている将来のあり方についてその方向を考えてみよう。

我が国の林業について求められている将来の課題は何か、一面戦後復興資材として用材需要が急激に膨張し、過伐につぐ過伐により国土保全の危機にみまわれ、公共的見地より保安目的による治山事業が叫ばれ、戦後十余年にして漸く、山村経済振興の観点より林業が考えられるに至つたことは周知のところである。

本県においても湖南の赤松林地帯の荒廃は全国的にも有名であるが、それらの目標も一応軌道に乗つた今日、林野利用の経済性の向上が叫ばれるのも当然である。林野の経済的利用の点より、その高度利用目的を達した場合の森林資源のあり方は、同時に国土保安機能をも十分に果し得るものであることは誰しも異論のないところである。かゝる意味で、林野の経済性を中心として将来のあり方はとらえられねばならない。

林野資源の中で最も社会的需要の多いのは、木材である。わが国における木材としての需要を用途別にみると下表のとおりで、昭和32年においてその36%は建築用材、21%はパルプ用材である。

用途別用材需要状況

(単位 1,000 立方米)

種別	年次	30年度		31年度		32年度		B/A	C/B
		(A)	(B)	(C)	(D)				
建	築	1,378.1	3.6	1,597.9	3.8	1,570.7	3.6	1.16	9.8
パ	ル	740.7	1.9	855.1	2.0	904.6	2.1	1.15	10.6
杭	木	239.6	6	264.1	6	287.3	7	1.10	10.9
そ	の	1,527.4	3.9	1,537.9	3.6	1,569.4	3.6	1.01	10.2
計		3,885.8	10.0	4,255.0	10.0	4,332.0	10.0	1.10	10.2

(註) 林野庁調査による 1,000 立方米 = 3.593 石

建築用材は、将来木造家屋の減少から来る需要の減退を危ぐする向きもあるが、木造建築用材以外の建設資材としての需要は年々増加の趨勢にあり、近い将来においてもこれが需要は急に減退すると考えられず、パルプ用材についても今後化学繊維工業が発達するとは云え天然繊維源としての木材竹材需要は今後ひなお増加して行くものと考えられる。総じて用材需要はさらに伸長して行くものとみていいのではないか。

次に日本の国内用材資源は全国的にみれば既に年間成長量を150%近く上廻つた過伐が行われている現状にあり、外材の輸入も下表のとおり増加の傾向がみられる。しかし現在のところ、その主たるものはフィリッピン北ボルネオのラワン材の輸入で合板加工等にされ、その半数がアメリカその他へ輸出されている。

用材の需給状況

(単位 1,000 立方米)

		30年度 A	31年度 B	32年度 C	B/A	C/B
年	初	7,728	7,732	7,302	100	94
生	産	3,829.8	4,136.2	4,171.2	108	101
輸	入	205.6	2,591	2,896	126	112
供	給	4,808.2	5,168.5	5,191.0	107	100
内	需	3,885.8	4,255.0	4,332.0	110	10.2
輸	出	1,491	1,832	1,629	123	89
需	要	4,034.9	4,438.2	4,494.9	110	101
年	末	7,733	7,303	6,961	94	95

(備考) 林野庁の調査による

燃料源としての薪炭の需要については今後文化の発展と共に固体燃料から液体燃料、気体燃料へと進化が考えられ需要の衰退はまぬがれない。

従つて将来の森林資源としては需要の面より用材源となる樹種の増成が求められるものとみられる。更に反  
面林野の経済的利用として成長度及び含繊維量が大き回転率の高い用材樹林が求められるが、その要量を満す  
ものとしてその性質上針葉樹林及び竹林が考えられる。

然し竹材については用材としての用途狭く又繊維原料としての利用についても未だ研究の段階を出ず、将来  
の見込は立たない。従つて現在の段階において林業の方向としては、用材として杉桧等成長量の大きい針葉樹  
林を増殖して山林資源を充実せしめなくてはならない。

かゝる方向に林野を形成するには林道を整備し奥地林の開発をはかり、有用針葉樹の造林をはかると共に、  
その伐出を便ならしめ生産コストの低下をはかることは云うまでもない。

更らに奥地の開発と共に、里山において殊に所有形態が零細にわたり、経営規模の小さいことは衆人の認め  
るところであるが、農外収入源としての家産的保有形態から、進んで農村余剰労力の投下によつてその利用度  
を高め、人工造林地たらしめることが必要である。又本県北部に多く残つている入会の林野利用は応々にして  
資源の蓄積を低下せしめ、非能率たらしめるので、これが利用を改め共同経営による針葉樹林形成につとめな  
くはなるまい。

人工造林地の拡大により従来から製薪、製炭原料を供給してきた広葉樹林地は漸次縮少されるから、製薪、  
製炭を業とする人々の生活のおびやかされることは当然予期される。従つて一時的には山村副業としての雑草  
栽培、山林労務等によつて山村住民の経済を維持せしめつつ針葉樹による人工造林地拡大を推進せねばならぬ。  
而も今後において針葉樹林経営について現在の小土地所有の様態がそのまま継続するとせば、その経営合理化  
を促進するため小土地所有者を糾合し、共同の力によつて連年継続経営方式による運営にまでおし進めらるべ  
きであろう。かゝる林地所有者又は経営者の所有経営状況の改善を推進し、経営合理化をはかる外、現在の林  
産物取引機構を改善し安定した価格維持と計画的、需給体勢をととのえ、資源保有状況と生産行程がマッチし  
た運営に進まねばならない。これについても山村における森林組合活動を活発化して資源増成、管理撫育の共  
同化による計画生産、生産資材施設の共同化による経費の低減、市場取引機構の改善に至る一貫した長期的計  
画によりその経済効果の向上につとめねばならない。

これらいづれにしても本県の如く小土地所有者の多い地域としては山林所有者はもちろんその利用者又それ  
らの指導者の考え方の中によくある非常備蓄的、家産的山林所有観念を放棄し、産業として経済的利用度を高  
める努力の下に国土保全的な機能をも充足せしめる理念をかん養することが最も重要な問題として認められる。

#### 第4章 森林資源増成計画

本県総林野面積は212,148ヘクタール、うち民有林面積は203,107ヘクタールで95.7%を占める。  
国有林は湖南山脚山間地帯がその約半ばを占め、その他では、湖西地帯北部、湖東山脚山間地帯に属する鈴鹿  
山系の奥地及び湖東湖辺地帯の近江八幡附近の山々がその主なものであるが本計画ではこれを除き民有林野  
のみについて計画した。

民有林203,107ヘクタールを森林計画樹立の時に算定された資料に基き、現在の利用状況を針葉樹林、  
広葉樹林、竹林及び除地（崩壊地及び原野）に分ち、針広葉、混合樹林はその混合の程度に応じ針葉樹林、広  
葉樹林に分ち、夫々の面積に包含せしめて林野利用計画の現在とした。

これらの林野のうち開墾及び道路その他に転用されるものを推計し、第5年目までに1,220ヘクタール第  
6年目より第10年目までに309ヘクタール、第11年目より第40年目までに1,534ヘクタールが民有  
林地より減少するものとし地域の利用状況に応じて、各事業着手の年に減少するものと計画した。これを地域  
別にみると第87表のように湖東平地地帯で789ヘクタール、湖東山脚山間地帯で629ヘクタールの減少  
が目立つがこれは愛知川総合開発事業計画による平地林の開墾及び名神高速自動車道路計画による用地が主な  
原因である。更に湖西地帯の518ヘクタール、湖南平地地帯の458ヘクタール、湖南山脚山間地帯の249  
ヘクタールがあるが何れも丘陵台地及び山脚林地の開墾計画が主要な原因である。

現在の林野利用状況は全県民有林中42.5%が針葉樹林であり、これを第10年目には113.4%、第40  
年には143.1%伸長させて全県民有林の第10年で48.6%、第40年では61.7%を占めさせるようになる。

広葉樹林は現在52.8%を占めるが第10年では現在の10.8%第40年では34.6%を減少せしめて全林  
野中、第10年では47.4%第40年では35%の面積を占めるに至らしめる。

竹林は全県では現在2,856ヘクタールあり全林野1.4%を占めるが、これは小林地が散在するか河川堤塘に群生しており良質材は生産されておらず、農家の自家用程度の利用に過ぎないので面積としては現状維持に留めた。除地は現在6,772ヘクタールで3.3%を占めるが人工造林事業の進捗、開墾その他により減少し第10年で2.6%、第40年では1.9%程度にして行く計画である。

各地帯別年次別計画は第87表及び第7図に示すとおりである。

第87表 林野利用計画表

(実数) 単位：ヘクタール

区分		地帯	湖南山脚山間	湖南平坦	甲賀重粘土	湖東湖辺	湖東平坦	湖東山脚山間	湖北平坦	湖北山脚山間	湖西	全県
現在	総面積		36526	11782	7418	6555	7012	46532	5831	46463	34988	203107
	樹林地	針葉樹	20658	10443	5752	4780	5911	20618	3025	8886	6238	86311
		広葉樹	14599	506	1369	1200	684	24238	2509	35425	26638	107168
	竹林	347	357	119	516	357	327	139	188	506	2856	
除地	922	476	178	59	60	1349	158	1964	1606	6772		
才1~5年減少面積			164	62	101	44	375	302	20	29	123	1220
第五年末	総面積		36362	11720	7317	6512	6637	46230	5812	46444	34865	201899
	樹林地	針葉樹	22260	10551	5720	4807	5585	21615	3074	10751	7815	92178
		広葉樹	13081	476	1359	1131	635	22939	2440	33541	25007	100609
	竹林	347	357	119	516	357	327	139	188	506	2856	
除地	674	336	119	58	60	1349	159	1964	1537	6256		
才6~10年減少面積			33	-	6	-	60	125	-	-	85	309
第十年末 (542)	総面積		36329	11720	7311	6512	6576	46105	5812	46444	34780	201589
	樹林地	針葉樹	23417	10749	5814	4856	5723	22581	3124	12338	9302	97904
		広葉樹	12238	417	1309	1091	446	22046	2400	32122	23504	95573
	竹林	347	357	119	516	357	327	139	189	506	2857	
除地	327	197	69	49	50	1151	149	1795	1468	5255		
才11~40年減少面積			52	396	79	25	354	202	39	77	310	1534
第四十年末 (572)	総面積		36278	11325	7232	6487	6222	45902	5773	46367	34470	200056
	樹林地	針葉樹	27729	10502	5833	5030	5419	28349	3184	22216	15253	123515
		広葉樹	8122	407	1240	912	416	16492	2331	22514	17600	70034
	竹林	347	357	119	516	357	327	139	189	506	2857	
除地	80	59	40	29	30	734	119	1448	1111	3650		

以上は広がりからみてきた林野の状況であるがこれらの林地に於ける資源については第88表の1より第88表の4に計画するとおりである。

現在については何れも昭和32年度末に於ける状況は森林計画に用いる資料に推計し以後についてはそれを基礎として林木の品種改良林地の肥培と相俟つて人工造林地を拡大してゆくものとして第5年末第10年末第40年末の現状を計画した。

これに基づき1ヘクタール当りの平均蓄積量の推移を図示すると第8図の通りになる。

第91表 人工造林地造成計画表

単位：ヘクタール

区分	地帯別	湖南山	湖南	甲賀	湖東	湖東	湖東山	湖北	湖北山	湖西	金  県	
		麓山間	平坦	重粘土	湖辺	平坦	麓山間	平坦	麓山間			
現 在	総面積 (A)	3,652.6	1,178.2	741.8	655.5	701.2	4,653.2	583.1	4,646.3	3,498.8	20,310.7	
	人工造林面積 (B)	914.38	290.58	212.23	136.86	163.64	1,422.15	176.53	694.21	586.11	4,596.69	
	比率 (B/A)	2.50	2.47	2.86	2.09	2.33	3.06	3.03	1.49	1.68	2.26	
計画期間中	人工造林面積 (C)	176.52	267.8	158.8	69.4	148.8	1,497.5	69.4	188.43	157.69	7,438.1	
	比率 (C/B)	1.93	0.92	0.75	0.51	0.91	1.05	0.39	2.71	2.69	1.62	
F 大川吉茂十画	第一年	人工造林面積 (D <sub>1</sub> )	357.0	49.6	29.8	9.9	29.8	307.5	9.9	37.69	31.73	1,487.7
		比率 (D <sub>1</sub> /C)	2.02	1.85	1.88	1.43	2.00	2.05	1.43	2.00	2.01	2.00
	第二年	人工造林面積 (D <sub>2</sub> )	347.1	59.5	29.7	9.9	29.8	297.5	19.9	37.68	31.74	1,487.6
		比率 (D <sub>2</sub> /C)	1.97	2.22	2.50	1.43	2.00	1.99	2.86	2.00	2.01	2.00
	第三年	人工造林面積 (D <sub>3</sub> )	357.0	49.6	39.7	19.9	29.7	297.5	9.9	37.69	30.74	1,487.6
		比率 (D <sub>3</sub> /C)	2.02	1.85	1.88	2.86	2.00	1.99	1.43	2.00	1.95	2.00
	第四年	人工造林面積 (D <sub>4</sub> )	347.1	59.5	29.8	9.9	29.8	297.5	19.8	37.68	31.74	1,487.5
		比率 (D <sub>4</sub> /C)	1.97	2.22	1.88	1.43	2.00	1.99	2.86	2.00	2.01	2.00

区分	地帯別	湖南山	湖南	甲賀	湖東	湖東	湖東山	湖北	湖北山	湖西	全  県
		麓山間	平坦	重粘土	湖辺	平坦	麓山間	平坦	麓山間		
第五年	人工造林面積 (D <sub>5</sub> )	357.0	49.6	29.8	19.8	29.7	297.5	9.9	37.69	31.74	1,487.6
	比率 (D <sub>5</sub> /C)	2.02	1.85	1.88	2.86	2.00	1.99	1.43	2.00	2.01	2.00
最終年計画 (S22)	総面積 (E)	3,636.2	1,172.0	731.7	651.2	663.7	4,623.0	581.2	4,644.4	3,486.5	20,189.9
	人工造林面積 (F)	1,090.90	317.36	228.11	143.80	178.51	1,571.89	183.47	882.64	743.80	5,340.48
	比率 (F/E)	3.00	2.71	3.12	2.21	2.69	3.40	3.16	1.90	2.13	2.65
十年末計画 (S22)	総面積 (G)	3,632.9	1,172.0	731.1	651.2	657.6	4,610.5	581.2	4,644.4	3,478.0	20,189.9
	人工造林面積 (H)	1,209.92	357.02	247.93	148.76	208.26	1,695.87	188.43	1,041.3	892.56	5,990.07
	比率 (H/G)	3.32	3.05	3.39	2.28	3.17	3.79	3.24	2.24	2.57	2.97
十四年末計画 (S22)	総面積 (I)	3,627.8	1,132.5	733.2	648.7	622.2	4,590.2	577.3	4,636.7	3,447.0	20,005.6
	人工造林面積 (J)	1,785.12	376.86	277.69	168.60	218.18	2,380.17	198.35	2,033.06	1,487.60	8,925.63
	比率 (J/I)	4.92	3.33	3.84	2.60	3.51	5.19	3.44	4.38	4.32	4.46